

第一二号に寄せて

吉見 孝夫

第一二号をお届けします。前号から一年経ってしまいました。これで一ダースです。

今号は前号に続き、明治期の文献に載ったイソップ寓話をリストアップしました。明治の雑誌にイソップを見た当初は、貴重と思ひ本文を前号では載せました。それに合わせ今号でも雑誌の場合は本文を掲載しましたが、寓話集等の方では省きました。多くの本は、今ではインターネットを介して容易に見ることができます。

寓話であれば、教訓は付きものです。原イソップ寓話は、それがどの時代どの文化圏でも通用する普遍性を持つが故に古今東西読み継がれているのでしょう。しかし明治イソップのそれには、近代日本の時流に合わせた修身の臭いが強く立ちこめています。それへの反発もあるでしょう、大正期になると子どもの読み物に文芸性を求める鈴木三重吉の『赤い鳥』が出現します。ですから三重吉にはイソップの影響はほとんどないように見えます。ところが意外な形で両者につながりがあることを、今号で鈴木潤吉氏が指摘しています。鈴木氏は三重吉の令孫です。日本語教育を専門とし、長沼直兄が創設した

歴史ある日本語学校、東京日本語学校（現・学校法人長沼スクール）の非常勤顧問です。かつては北海道教育大学において私の同僚でもありました。現在は祖父の顕彰活動に奔走していらつしやいます。

原爆ドームから五〇メートルほど離れた相生橋のたもとに『赤い鳥』の文学碑があります。私もその一人だったのですが、多くの観光客は気づかずに通り過ぎてしまいます。広島へお出での折は是非お立ち寄りください。

前号で扱った『DOSHISHA 文学会雑誌』のイソップ寓話を翻訳した「東州散史」について、中務哲郎氏が同志社大学の関係者に問い合わせてくださいました。感謝申し上げます。どのような人物なのかは、現在のところ残念ながら不明です。

山西正子氏は、常々示唆に富むアドバイスや、興味深いエピソードを送ってくださいます。その一つを披露します。一九七六年にNHKの「みんなのうた」で放送された「ゴクロウサン」という歌の二番がイソップの「月と母親」に似ているとのこと。作詞者（伊藤アキラという方。「オー、モーレツ」「この木なんの木」「やめられない、止まらない」といったコマーシャルソングの

作詞者でもあるそうです）がイソップを踏まえていたとは断定できませんが、こんな歌詞です。

三日月、三日月ごころうさん

せつかく瘦せたと思つたら

またまたまあるく太るのネ

はけたと思つたジーパンも

LLサイズに変えなくちや

ヒーハツハヒーハツハごころうサンバ

ゴクロウサンゴクロウサン

ゴクロウゴクロウゴクロウサン

西村正身氏が、「タントラ・アーチャーイカ」をドイツ語から翻訳されたことは第一〇号で紹介したところです。その後、御自身の手で改訂版を作成されました。関心をお持ちの方は、西村氏が吉見に御連絡ください。

佐藤一好氏からお送りいただいた左記の論考で中国明清時代に義獣譚集というのを知りました。「動物たちの義行を顕彰する動物譚集」とのことです。イソップにもある、人に助けられたライオンが、その恩に報いる「アンドロクレスとライオン」の話も姜泣群輯『重訂虞初広志』巻五に「義獅記」と題して収められていると教えられました。

・『義獣譚集としての馮景「書十義事」』（『日本アジア言語文化研究』第一三三号、二〇一九年三月）

この一年、大学院生あるいは大学院出たての若い方々の論文をいくつか読みました。お読みでない方のためにご紹介します。

第一〇号でも紹介した李澤珍^{いづみん}氏が取り組んだのは、無刊記の古活字版『伊曾保物語』の刊行年月を確定するという大問題です。第一種本は慶元期という説を私も無批判に受け入れていましたが、今後は改めなければなりません。無刊記なのになぜわかるのか。ここで種明かしをするわけにはいきません。左記の原論文をお読みください。

・「古活字版『伊曾保物語』の出版年代再考」（『国語国文』第八七巻第七号、二〇一八年七月）

日本におけるイソップ絵という点、質においても量においても第一に河鍋暁斎が挙げられます。私も「河鍋暁斎『伊蘇普物語之内』の刊行形態と新出三図——重山文庫の調査から——」（『暁斎』第一〇八号、二〇一二年一月）という小論をものしたことがあります。その全貌が美術史を専門とする定村来人^{さだむら}氏の一連の論文によって明らかにされました。

・「ハーヴァード・イエレンチン図書館蔵河鍋暁斎『伊蘇普物語之内』新出六図」（『暁斎』第一一四号、二〇一四年一〇月）

・「河鍋暁斎『伊蘇普物語之内』の制作年について——イスラエル・ゴールドマン・コレクション蔵の一四図から分かること」（『暁斎』第一一五号、二〇一五年一月）

・「『暁斎楽画十一号』『或喇叭の者とりこになつて』——図像の典拠となつた『イソップ物語』挿絵と上野戦争」（『暁斎』第一二〇号、二〇一六年九月）

・「天理大学附属天理図書館蔵 河鍋曉斎「伊蘇普物語之内」新出二図」(『曉斎』第一二七号、二〇一九年三月)

・「河鍋曉斎とイソップ物語——一八七〇年代における新たな試みと展開」(『浮世絵芸術』第一七八号、二〇一九年七月)

定村氏はこれらを博士論文にまとめられると伺っております。

はまだゆきこ
濱田幸子氏はイソップ寓話が日本においてどう変容されたかをテーマとして精力的に論文を発表されています。少し古くなりますが、以下のものがあります。

・『伊曾保物語』と江戸時代におけるその受容について(『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第三八号、二〇一〇年三月)

・『伊曾保物語』成立についての一考察——イソポの伝記を中心に——(『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第三九号、二〇一一年三月)

・『伊曾保物語』と書籍目録(『京都語文』第一八号、二〇一一年一月)

・『伊曾保物語』における教訓について(『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第四〇号、二〇一二年三月)

・「説話と教訓の伝承——『伊曾保物語』「男、二女を持つ事」と『三国伝記』二人のつま、かみをぬかれし事——」(『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第四一号、二〇一三年三月)

よしかわひとし
吉川 斉氏には次の論文があります。吉川氏は西洋古典学を専門とされています。ギリシア語・ラテン語文献を対象とした左記論文を専門的に評価する能力が私にはありませんが、扱われている問題は日本語への翻訳とも無縁ではなさそうです。

・「1505 年アルドウス刊行イソップ集におけるラテン語翻訳について——*quae ante habebantur, infida admodum erant*——」(『東京大学西洋古典学研究室紀要』第一〇号、二〇一七年十二月)